

前回、赤沼弘さんのことを書いたことがきっかけで、沢山の方々から感想や情報をいただいた。感謝したい。ところで、赤沼さんといえば、グラフ雑誌『ソビエト婦人』日本語版の編集長。だから今回は『ソビエト婦人』について書きたいと思う。

『ソビエト婦人』は、「ソビエト婦人反ファシスト委員会と全ソ労働組合中央評議会の社会・政治文系月刊誌」として、1945年に第1号が発行された。「反ファシスト」とあるように、大祖国戦争におけるソ連の女性たちを鼓舞し、結集させ、戦いに勝利するためのものだった。日本語版は1956年1月号が創刊号とされている（ちなみに1956年1月号には創刊を表す記事などは一切ない）。この雑誌は、ロシア語、日本語、中国語、朝鮮語、ドイツ語、ハンガリー語、英語、フランス語、ヒンディー語、スペイン語の他、4か国語で発行され、世界120か国に送られていた。

ソビエト婦人反ファシスト委員会の委員長は、元宇宙飛行士のテレシコワ。委員会は1956年に「反ファシスト」の冠がとれ、

「ソビエト婦人委員会」と名乗るようになる。そして雑誌『ソビエト婦人』は、ソビエトの婦人の生活や国際交流を広く各国に紹介し、世界の婦人の友好と発展を強化する雑誌となった。ところで、この雑誌の日本語版は、各国語版に比べ、特に英米独仏版に比べ、発行部数が多かった。また日本語版のグラフ雑誌としては、『ソビエトグラフ』（旧名『ソビエト同盟』）が先に発行されていたのだが、『ソビエト婦人』のほうが読者が多かったようである。それは、日本の女性読者からのお便りを頻繁に紹介していたから。また、60

年代からソ連を訪問する婦人代表団が増え、その紹介記事も発行部数を伸ばすことにつながった。さらに代表団が雑誌を日本に持ち帰って、周りの人たちに紹介したことも部数拡大を促した。

たとえば、1962年11月号の「お友だちの文通」という記事は、1962年1月号に掲載された電話交換手の手紙にたいする返事の第2弾で、誌上で手紙のやり取りがさかんに行われていることがわかる。まさに雑誌自体が国際交流の場だった。この雑誌には洋服の原寸大の型紙が付録されている。女性誌であると感じさせるものである。またモードの記事もある。さらに読み切り小説、読者通信、子供向けの童話、料理、医学などの記事も。写真もふんだんに使われており、カラー記事だってたくさんある。号を重ねるにつれて、さらにたくさんの日本人が登場するようになる。有名な人も無名の人も。日本語版を読んでいると、女性を中心とした日ソの交流が活発化していたことがわかる。

私にとってうれしかったのは、記事の著者として、そしてまた翻訳者として、赤沼弘さんや岡田嘉子さん、川越史郎さん、河崎保さん、河崎美智子さん、石井次郎さん、東一夫さん他、モスクワ放送日本語課の先輩たちの名前を見つけることができたことだ。彼らの足跡を追い、活躍を知ることが今を生きる私の使命である。

